

児童期から思春期にかけての「穴」のある風景構成法の特徴について

—健常群の発達的特徴および臨床群との比較検討—

19011FRM 山田 さくら

Ⅰ. 問題と目的

風景構成法は中井久夫によって1970年に報告された芸術療法の一つである。当初は精神科領域における統合失調症者への非言語的なアプローチとして、また箱庭療法への適応を図る予備診断として考案されたものであった。しかし近年では大人だけではなく子どもの心理療法の場面でも、アセスメントを目的とするものや治療の一環として描画が用いられることも多くなってきた。大場(2019)は子どもにとって絵を描くことはごく自然な行為の一つであり、子どもの心理療法であるプレイセラピーの中で自発的に子どもから絵を描き始めることは少なくないと述べている。また描画は心理アセスメントに用いられることが多く、描画を通して子どもたちを理解し、支援の方法を検討することが可能であるとしている。

そこで本研究では高橋(2016)が考案した「穴」のある風景構成法(以下:LMT-Hole)を用いて児童期から思春期にかけて、描画に表れる特徴を検討していく。LMT-Hole アイテムの「穴」は、通常風景の中には見当たらない想起しにくいものではあるが、穴の奥に存在する無意識の領域からのメッセージとして、多種多様なイメージを賦活させて投映を多く引き受け、これを付加することで心理アセスメントや心理療法に有効に働く可能性があると考えられている。したがって小学生と中学生にLMT-Holeを実施し、風景全体に表れる特徴やアイテムとの関連を見て、児童期から思春期にかけてはどのような特徴があるのか、特徴から児童期・思春期に表れる問題を把握し、スクリーニングに役立つ指標を見出せるのかどうか検討する。

そこでまずは健常群として小学生から中学生の児童生徒に対して集団法でLMT-Holeを実施する。健常群に対してLMT-Holeを実施するこ

とでどのような特徴があるのか、スクリーニングに役立てることが可能かどうかを検討する。LMT-Holeに表れる特徴を把握し、スクリーニングに役立てられることが可能であれば、臨床現場や学校現場での児童生徒の抱える問題のサインに気づき、早期対応や予防的働きが期待できると考える。

次に臨床群として適応指導教室に通う不登校を主訴としている児童生徒に個別法でLMT-Holeを実施する。不登校という問題を抱えている児童生徒の描画にはどのような特徴が表れるのか、そして健常群と比較した際に特徴に違いがあるのか比較検討を行う。

Ⅱ. 方法

A 小学校に所属する2年生41名(男児18名, 女児23名), 5年生55名(男子29名, 女子26名), B 中学校に所属する1年生51名(男子22名, 女子29名), 適応指導教室に通っている児童生徒4名(男子3名, 女子1名)を対象とした。A 小学校とB 中学校では集団法で、適応指導教室では個別法でLMT-Holeを施行した。描画終了後にLMT-HoleについてInquiryを実施した。

Ⅲ. 結果

1. 統計的側面からの結果

LMT-Holeの特徴を検討する際に、以下の3つの項目を取り上げた。①現実検討能力や衝動性・不安感・緊張感をうまくコントロールしているかを検討するために「恐竜・ゾウ・ライオン」「噴火した山」「入り乱れた天気」「おぼれている人」「車にひかれた人」とネガティブな印象を与える特異表現の有無, ②風景全体がまとまりのある構成になっているか、アイテム同士の繋がりが自然かどうかを検討するために絵のバランス, ③情緒的に豊かな表現が可能か、社会的に受け入れられる彩色をしているかどうかを検討するために色

彩という観点から分析を行った。

その結果、①特異表現の有無に関して、小学校 2 年生は小学校 5 年生と中学校 1 年生と比較して、特異表現がある人が有意に多いことが分かった ($\chi^2(2)=7.387, p<.05$)。②バランスに関して、小学校 2 年生はバランスが悪い人が有意に多く、小学校 5 年生はバランスがやや悪い人が有意に多く、中学校 1 年生ではバランスが良い人が有意に多いことが分かった ($\chi^2(4)=29.183, p<.001$)。③色彩に関して、小学校 2 年生は小学校 5 年生と中学校 1 年生よりも色彩が不自然な人が有意に多いことが分かった ($\chi^2(4)=26.194, p<.001$)。

表 1 学年と特異表現の有無

| | ある | ない | 合計 |
|----|------------|-------------|------------|
| 小2 | 12 (29.3%) | 29 (70.7%) | 41 (100%) |
| 小5 | 5 (9.1%) | 50 (90.9%) | 55 (100%) |
| 中1 | 7 (13.7%) | 44 (86.3%) | 51 (100%) |
| 合計 | 24 (16.3%) | 123 (83.7%) | 147 (100%) |

表 2 学年と絵のバランスの差

| | よい | やや悪い | 悪い | 合計 |
|----|-------------|------------|------------|------------|
| 小2 | 21 (51.2%) | 5 (12.2%) | 15 (36.6%) | 41 (100%) |
| 小5 | 42 (76.4%) | 10 (18.2%) | 3 (5.5%) | 55 (100%) |
| 中1 | 46 (90.2%) | 2 (3.9%) | 3 (5.9%) | 51 (100%) |
| 合計 | 109 (74.1%) | 17 (11.6%) | 21 (14.3%) | 147 (100%) |

2. 事例別結果

健常群では小学校 2 年生と中学校 1 年生の健康的に見える例と気になる例を各 1 例ずつ計 4 例取り上げた。臨床群では小学校 2 年生と中学校 1 年生、1 例ずつ計 2 例を取り上げた。

健常群の健康的に見える例では、特異表現がなく、バランスも良く、色彩が自然であった。小学校 2 年生では家イメージが「お姫様が住んでいる」というファンタスティックな表現が見られたが、ポジティブな印象を与えるものであるためファンタスティックな要素を想像できるという心のゆとりが備わっていると理解した。気になる例ではバランスや色彩はある程度整っているが、「噴火した山」「深さ 10m の穴」「車にひかれた人」などと直接的に攻撃性や不安感を感じさせる特異表現が存在していた。健康的に見える例では、心のゆとりが備わっていることが理解できたが、気になる例では、心のゆとりは健康的に見える例よりも備わっておらず、不安感や恐怖感が直接描画に表現されやすいということが理解できた。

臨床群では特異表現が見られても健常群とは異なり直接的な不安感を感じさせるものではない。色彩は自然であるが、バランスが悪いことが分かった。風景全体に窮屈感を感じ、アイテム同士の繋がりが悪いという特徴が見られたため、物事がどういう繋がりをもって構成されているかを把握する力が弱いと理解した。

IV. 考察

1. 統計的側面からの考察

学年が上がるにつれて特異表現は減少し、バランスがよくなり、色彩も自然になっていることがうかがえる。学年が上がっても特異表現が表れる人は、自分が表現したい衝動性をコントロールできず、敵意的な感情や不安感が投射されたと理解できる。バランスは 11 個のアイテムの繋がりを考えて配置しないとイケない。バランスが悪いということは、アイテム同士の繋がりを瞬時に想定することが困難なため先を見通す力が弱いと理解できる。色彩は描画を終えた後の段階である。描画の際に生じたネガティブな感情を色彩段階で切り替えられないと、不安感や緊張感がそのまま反映されて色彩が不自然になると理解できる。学年が上がるにつれて衝動性をコントロールする力、先を見通す力が備わってくるため、徐々に特異表現も減少し、バランスも良くなり、色彩も自然になってくることが理解できる。

2. 事例別結果からの考察

事例を通してみると、健常群でも健康的に見える例と気になる例があることが分かる。学年が上がるにつれて衝動性のコントロールや先を見通す力は備わってくるが、それが備わっている人と備わっていない人が同学年の中でも存在する。備わっていない人の特徴を支援者が理解し、困難さを抱える児童生徒を把握することで、早期対応や予防的働きが可能になり、スクリーニングとして LMT-Hole が役立つのではないだろうか。

臨床群は直接的に感情を表現しない代わりにアイテム同士の窮屈さ、繋がりの悪さとして表れる。感情を直接的に表すことに困難を感じており、それをどのように発散すればいいのか分からずに困り感を抱いていると理解できる。